

石川 哲先生、ご指導本当に有難うございました

日本臨床環境医学会理事長
坂 部 貢

石川先生に初めてお目にかかったのは、今から25年ほど前、いわゆる環境ホルモンプーム真っ只中での夕食会だったと記憶しています。当時は北里大学医学部長の任に就かれており、大変ご多忙であったにもかかわらず足を運んでくださいました。宮田幹夫先生（北里大学教授・当時）、柳沢幸雄先生（東京大学教授・当時）も同じテーブルで、食事をしながら、また肩の力を抜いて「環境と健康」の話題について議論を交わしました。医学部長と聞くと当時の感覚では、直接お話もできない特別なフロアで執務される雲の上の先生という印象です。事実、私が所属していた東海大学医学部の黒川 清 医学部長とは、一度もじっくりとお話する機会はありませんでしたので、最初は大変緊張したのを覚えています。でも石川先生はとても話題が豊富で、いつのまにか周りを自分に引き込んでしまう強い魔力をお持ちでした。「最後に記念写真を撮ろうよ」と声をかけてくださり、先生が鞆から出されたカメラは「ミノックス」、「何とおしゃれな、流石眼科の先生だな」と心の中でつぶやいたのが思い出されます。夜帰宅後、先生から頂戴したお名刺のEメールアドレスに、御礼のメッセージを送ったところ、すぐに「ありがとうございました、また教えてください 石川」と返信があり、簡単な1行メールでしたが、とても感動したのを覚えています。その後何度か学会、研究会でお目にかかる機会がありましたが、ご自分の専門分野でない領域のセッションにも顔を出されて、メモを取っておられました。専門分野外の最新知見を常にキャッチアップすることの重要性を強く意識されていたのだと思います。

「こんど白金の北里に文部省学術フロンティアの資金でクリーンルームを作って、ケミカルの研究をすることになったんだけど、先生来ない?」、おそらく宮田幹夫先生にそそのかされて、そのようなお声がけをされたのだと思いますが、当時の立場では「はい」としか返答のオプションがなく、そのまま北里研究所本館（当時）の顧問室で石川先生のインタビューを受けました。まさに私の大学人として今日までのベクトルを決めたのは石川先生（表）と宮田先生（裏）です。急いで東海大学退職の準備をし、4月から北里研究所に入職しました。新しい環境に慣れる時間もないまま「6月、ダラスで臨床環境医学のシンポジウムがあるけれど、僕の持ち時間の半分をあげるから、何かしゃべらない?」と石川先生からのリクエスト、やはり「はい」としか言いようがありませんでしたが、特に発表内容については口出しされることもなく、自由にチャンスを与えてくださいました。石川先生からチャンスをいただいたことで、その後10年に亘り、毎年ダラスに招聘されることになります。ダラスでの石川先生の口癖は「先生、今日は何を食べる?」で、大変グルメな一面をお持ちでした。メキシカン、チャイニーズ、すし等々、どのお店のスタッフも先生のことを記憶されていて大変驚きましたが、もっと驚いたのは、ダラス周辺の町の多くはいわゆる「ドライ」でアルコールが手に入りません。「ホテルのフロントに行って、一番近いドライでない町がどこか聞こうか?」と言って、ホテルの部屋で夜飲むアルコールを調達する執念(?)は今も忘れられません。

石川先生とのエピソードの数々を、限られた誌面で紹介することは不可能ですが、「師の背中を見て人は育つ」とよく言われます。環境問題に頭を突っ込むと、その日から国と企業を敵に

回すことにはなりますが、これらの敵と「上手に喧嘩をする方法」を石川先生の背中を見て勉強させていただきました。「上手な喧嘩」とは、いかに彼らから研究費を引き出すか、です。石川先生から学んだ「喧嘩術」は今も生きています。そして環境問題に人生をかける後輩たちに受け継がれていくことでしょう。

石川先生の学問的な業績と医学界での功績、眼科臨床医としての社会的貢献に関するご紹介は他の先生方にお任せし、石川先生のお人柄を中心として、先生と共有した時間を振り返りました。目にみえる命、すなわち石川先生の一つ目の命を感じることは今後叶いませんが、二つ目の命は、私たちの心の中にいつもあります。二つ目の命が色褪せないように石川先生が作られた本学会を継続的に盛り上げていくことが、私たちに与えられた使命かと思えます。

「石川先生、日本から別々の便でダラス入りし、フォートワース空港で待ち合わせして、すぐに美味しいものを食べに行きましたね、次は天国で待ち合せましょう、それまでに美味しいお店の開拓をよろしく願います。楽しみにしています。」